

新出「立圃自筆」研究と資料

寛文元年
林鐘奥書

檀 上 正 孝

万治四年（一六六一）は、四月二十五日をもって元号が改まり、

寛文元年となった。その年の林鐘（六月）、六十七歳の立圃は、自作

の句文をつらねた、かなり長い一巻を清書している。それが、ここ

に紹介しようとする「立圃自筆寛文元年
林鐘奥書句文長巻」（仮題。以下に

「本巻」と略称）である。

本巻は、平成六年一月に広島県福山市の福山城博物館で催された

「雛屋立圃——江戸前期の福山俳諧——」展に出品されたもので、

学界に未紹介の新資料と思われる。まず書誌的な事項について概要

を記す。寸法は縦二七センチ、横四九三センチ。金泥で草花等の地

模様を散らし描きにした、やや厚手のきらびやかな料紙に、立圃が

例の流麗な筆蹟で、二三〇行にわたって自作の句文を記している。

なお巻首に横二一センチ程の見返しをつけて、巻物仕立の表装がな

されている。作品の分量が相当に多く、内容も多彩であり、その

上、奥書に、

万治四
寛文四
林鐘
立圃書 圃

と執筆の年月が明記されている点、立圃研究の基礎資料として重要であることを思い、ここに作品の全容を翻刻紹介することにした。

原本の調査と翻刻を許可して下された所蔵者・佐久間康夫氏と、

幹旋の労をとられた福山城博物館当局、および同館「友の会」会長

平井隆夫氏、広島文教女子大学教授下垣内和人氏らの御好意に深く

感謝するものである。

従来、この作品には定まった名称がなく、福山城博物館の展示目

録には「京の四季の名所記」と仮題されている。しかし、本巻の内

容は歳暮と春夏のみで、秋冬を欠いているから、「四季」というのは

適切であるまい。また、天理図書館所蔵「立圃集」の内の一巻

は、「花見之記」等（わ43・8・9）と仮題されているが、その内

容は、ここに紹介しようとする「本巻」の一部と殆んど合致する。

しかし、「本巻」の記事は花見のみに終始するものではないから、「花見之記」と限定的に題するのも適切ではない。

本巻は、立圃(らしい人物)が師走の二十日ごろ上京し、歳暮の京の風情を記すところから筆を起し、年が明けて(万治四年と覚しき)新春の句文が続く。次いで東山あたりの花見の情景を多角的に描き、或いは桑門や風流人たちの脱俗的な閑居のさまを叙し、季節は時鳥から五月雨のころに至る。さらには氷室・嘉定喚・六月萩の句々をつらね、巻末には前述のごとく、執筆年月を明記し、立圃の署名押印がなされている。これらの諸点を勘案して、いま仮に「立圃自筆<sup>寛文元年
林鐘興野</sup>句文長巻」と題しておくのである。

因みにいう。本巻の前半部分は、前述のごとく天理図書館所蔵の「花見之記」等と殆んど同一であるが、なお部分的には、本巻の「数大納言殿、云々」(13~19行)に相当する個所が、同じく天理図書館所蔵「立圃集」の内の一卷「十八番句合」等(わ43・8・23)の一部分と殆んど同一である。これに類する例は、他にも多くあるものと推測される。念のため、最も手近な例を更にあげると、前記の福山城博物館の立圃展に出品されていた別点にも、立圃自筆の句稿切と覚しき下記のような懐紙があり、本巻との共通性がひとときわ注目されるのである。

そもそも、立圃自筆の懐紙や巻物類には、このような同一的、ないし類似的の句文を、繰り返し執筆することがしばしばあるので、

立圃自筆懐紙

福山市 佐久間康夫氏所蔵

しはすの廿日比、東山にとふべき
人ありて、四条河原、祇園林を
ゆくに、爰かし遊びあける人
あるをみて

時しらぬ京の遊山やふじの雪

旧き友達にあひて

雪や月つもれば老の鬢しらが

又

雪の日の茶酒や是も三の友

東門跡様にて

をく炭もしろきを後のいろり哉

歳暮、九條様にて

陵王の舞の手もがな年の暮

元日、春いまだいたらざる心を

けふはまた六位たち也春の色

子日

引つれて遊ぶや小松小姫御前

羽子板の数や絵合鳥あはせ

鶯や源氏のまきを哥の題

(印なし)
立圃

(縦25.5×横39.5センチ)

今さら特に珍しいことではないが、それらの句文を比較検討することによって、立圃句文の表現意識や推敲過程を、具体的に、より詳

しく考察することが可能となるであらう。

すなわち、前ページに引用した「句稿切」懐紙は、後に掲載する「本巻」の（3行目）「しはすの廿日の程」、および（22〜59行）に相当する一連の句文と共通性を有しているが、かれこれを比較すると、地の文、詞書、発句の配列、付句の有無などの諸点において、かなり大きな差異のあることが知られるであらう。懐紙では詞書の記述が簡略であるのに比して、本巻では詞書の記述が詳細になり、付句（三句）が挿入されており、全体の分量が一九行（懐紙）から三九行（本巻）へと倍増しているのである。しかも一方では、懐紙に記されていた「東門跡様にて」「歳暮、九條様にて」のような詞書が、本巻では「さるかたにまいらたれば」「歳の暮るもおしまれて」と変わり、貴顕の人々の個有名詞を消去して、一般化した記述に移行する。

さて、本巻は「寛文元年林鐘」の奥書を有するのであるから、常識的に考えればその前年、すなわち万治三年の歳暮から、寛文元年六月に至る、およそ六箇月間の句日記ふうの作品、と読めるであらう。しかし、事実はずしもそのように単純ではなく、さらに一句一句、詳細なる考証を必要とするものようである。たとえば、本巻に載る歳旦句、

けふはまた六位たち也春の色（53行目）

は、延宝二年板『歳旦発句集』（古典俳文学大系2『貞門俳諧集二』

所収、二九九頁）によると、万治元年の作として見えるから、この資料を抛りどころとすれば、万治四年（寛文元年）より三年もさかのぼることになるのである。これは、あくまでも一例であるに過ぎない。

すなわち立圍は、数年前の旧作の中から、あれこれの句文を取捨しながら、寛文元年六月に、清書の一巻を書きあげた、ということになるのであろうか。——それは、後に芭蕉が「あつめ句」を執筆した時の方法とも類似しているようで、まことに興味ぶかく思われるのである。

凡例

- 一、翻刻にあたっては、できるだけ原巻の佛をとどめるべく、用字・仮名づかい、行うつりは、そのままとした。発句は二字下げ、詞書は四字下げ、等の表記も、ほぼ原巻の様式に従った。
- 一、各行の頭には、便宜上、アラビア数字で一連番号（ただし煩わし過ぎるので五つおきに）を付した。
- 一、原文を読みやすくするために、私意をもって句読点・濁点を加えた。（句読点・濁点を除けば、そのまま原巻に忠実な翻刻に還元できる。）

付記

従来、立圃に関する文献資料の最も整備されたものは、米谷巖編「野々口立圃年譜」(古典文庫512『十帖源氏下』所収、平成元年七月)であつて、基礎資料を網羅し、詳細をきわめるが、「本巻」については未だ記載されていない。実は、冒頭に記した通り、本巻が初めて公開されたのは、ことし平成六年一月の「立圃展」だったのである。そこで敢て「新出」の文字を冠して作品の全容を紹介し、もつて米谷巖教授の学恩に報いんとする次第である。

翻刻

1 難波津の遠きむかしの跡よりも、今の

京の花なる春を待えんこそうれし

かるべけれど、しはすの廿日の程、にはかに

のぼるとて、はるけき淀川の堤を過て、

5 鳥羽田の面、横大路のあたりより

四方の山／＼を見れば、日ごろふりつる

雪ハしろくかさなりながら、風ゆるゝか

にて、民のかまどの夕けぶり、にぎはゝ

しく、まことに世にすめらば爰にこそと

10 思ひかへされ、ゆく／＼我いらんとするかたハ

小家がちなれど、年ごろしりたる人の

心やすきをたづねてをりぬ。折しもあれ、

春ちかくなるまゝに、人のこゝろづかひも

やるかたなげに、あしを空にはしり

まハリ、聲ことばもはげしく物くるおしく

日のくるゝもおしげにて、とをき近き

物のをと、それとなくこれとなく、かしがま

しくきこえて、すぶろに心うつりゆく。

さる程に、田舎よりのぼるもあり、今又

くだる人もおほく、かく町／＼の物さハ

がしきハ、世のしづかなるゆへなりと思ひ

しりぬ。我、此たび東山に、とふべき人

ありて、たゞひとりゆくに、祇園林、八坂の

塔のあたり、爰かしこに二三人、打つれ

／＼あそぶ人あり。茶屋の内にハ、酒に

ゑひて、うたひまふを、あやしくおかしと

聞捨て、其夜、昨非といふ人のもとに

四五人打より、けふの事ども語るとて、

時しらぬ京の遊山や富士の雪

といひければ、付句に、

寒さハうそよ比叡の大嶽

又の日、さるかたにまいりたれば、囲爐裏

のもとちかくにて茶などたびたるに、

をく炭もしろきを後のいろり哉

付句に、

みぞれ酒より先古酒の間

雪ふり物さびしき夜、若き人く

来りて、老たるものゝ爐のもとをはなれ

ずこもりあけるを、おかしげにいへれば、

雪や月つもれば老の髭しらが

付句に、

とらで夜る猶めせ綿ほうし

旧き友だちのもとにて、

雪の日の茶酒や是も三の友

歳の暮るもおしまれて、

陵王の舞の手もがな年の暮

あらたまる春のひかりも、人くの袖の

よそほひも、都の空ハことさらにて、門く

の松、折しりがほに若やかなり。され

ども、ことしの春へいまだいたらずと

いふこゝろを、

けふはまた六位たち也春の色

二日ハ子日なりければ、

引つれてあそぶや小松小姫御前

女子どもの、やり羽子の数くあらそへる

を見て、

羽子板の数や繪あはせ鳥合

はつ音をきよて、

うぐひすや源氏の巻を哥の題

ある人、柳をいけて、句をといへるに、

花入の名によせ継の柳かな

宿にかへりて友だちかたらふに、今朝の

會席の花ハ何をかと問れける人に、

床にいけてさかぬ花見る柳かな

梅ハ兄其いもうとや姫小姿

千句第一

床こそハ花の名所の一さかり

卓に梅花を入れて、馬形の香爐を

をけるに、

花は梅馬蹄かうバし卓香爐

男ハ僧になり、僧又還俗せり。この

句をさかさまによめバ秋になる也。

名ハ軒端梅ハたとも余所目かな

春雨ふりつゞき、ひがんざくらハ、いつの

間にか咲散にけんしらず。空少し

暗たりけるに、五六人かたらひあひて、
 ひがし山の花見にゆきければ、一重の
 花ハうつろひ、八重桜ハいまださき
 残りたるけしき、いはんかたなくおも
 しろし。先かたはしより花／＼の名を
 かぞへて、又ふりくる雨の程、まぢかき
 かくれによりゐて、

見めぐれば十方くれよ花の雨

又の日ハ、雲しづかに晴たり。けふハ三人
 ともなひ出て、きのふのあかさざりし花の
 かげ又こそとて、清水にまうでよミれば、
 思ひしごとく咲も残らず、誰も心は
 ひとしきにや、老たるも若きも、けふ
 こそは、あすハと、おもへるさまにて、つどひ
 あへり。人すくななる山陰よりみれば、
 たかきいやしき、おとこ女の、よしめく
 袖のゆきずり、是こそ都なれと、思ひ
 あたりて、

花と袖いづれ都のはやり色

慈悲心や清水山の花の色

谷峯の致景すぐれたる所、宮寺の

山のさくらハ白雲のたちのぼれるごとく
 に、おもひめぐらされ、さてハあの山陰の
 谷あひにこそ人家ハこもらめと、ゆき／＼
 てみれば、さハあらで、遊山の人のミ

ふるきもあたらしきも、国々におほかるべ
 けれど、爰ハ都に近からず遠からず、道
 すがら見物の数をつくせる中にも、
 祇園女御の腰もとにめしつかへれし
 女房、茶屋のかゝとなれる、其すゑ／＼
 いまも名高きふり袖のよそほひ、清水
 坂のやきもちも、かたはらいたきなく
 さめにて、まいり下向のおさなひの心を
 すかすはしとなる、面白の花の都や

祇園清水と、うたひはじむるも、げに
 ことハリ也。京の人ハいふに及ばず、遠き
 るなかの人／＼も、見ん事をねがへるにや、
 馬乗物の数／＼、かちはだしなるもの
 までも日々にたゆる事なし。ことさら
 今ハ名木の花ざかり、ながめにつどく
 都の町／＼、さかへ久しきゆへなるべし。
 清水と京や栄花の二字の時

清水と京や栄花の二字の時

山のさくらハ白雲のたちのぼれるごとく
 に、おもひめぐらされ、さてハあの山陰の
 谷あひにこそ人家ハこもらめと、ゆき／＼
 てみれば、さハあらで、遊山の人のミ

おほかりければ、

雲おこる人家ハ暮よ花の山

120

八坂のかたはらに乘門の庵あり。入て
見れば、都にをとらぬ程の八重ざくら、
いく木ともなく咲ミだれたり。いかなる人の
うへけるぞと、あやしくて、

庵室ハなど世さかりにさくらばな

125

家に帰り、友達あつまりて物語しけるに、
人のかたより、庭の桜なりとて、おほき
なる一えだを給ハれるを、瓶にさすとて、

鬼門をやしらでさかゆく家桜

130

嵯峨の山かげをゆくに、藪垣ひろく
ゆひまハし、しをり戸うるハしき所あり。

いかなる人のすむにやと、近き小家に

よりてとへば、いにしへハ名あるさぶらひの、

世をうしとやおほされけん、妻子をば

ぐしながら、おこなひの道を心にかけて、

むかしを思ひはなれ、時／＼ハ、あたりの

僧たちを請じて法文をよミ、里の

わらべ共に哥うたハせ、明暮、心を

なぐさめ、程ちかき田畠をかひ取て、

140

身のゆくすゑをたのめをき、四十余年
こゝにかくれてすめり。庭の池にハ、うしろ
の山水をたゞへ、岩木としふりて
見どころおほし。さくら、やまぶきも、漸
さかりにやあるらん。入て見給ふべしと
かたる。まことにかしこき心にこそと興
ゆかしければ、

145

しるべして見せよ優婆塞うばざくら
とはいひけれど、日も暮ぬべけれどとて
むなしく帰りぬ。

住吉にまうでう海づらに

150

なミのたちけるをみて、

作り手ハあらしや波の花鳥

濱の館より、はるけき海のおもてを

見わたし、波のたちぬ、松どもの行かふを

なぐさめにて、座敷の前にハ木草も

すくなく植たりとて、しやうじをあけ

られたり。まことに萬里のなミまで

おもひやられておもしろし。融大臣ハ、

千賀のしほがまを都のうちにうつし

たまへり。かくをのづからなる風景は

155

いづくの誰人かうつし見るべきと思へるゝに、

枝おりもとり木もえやハ浪の花

人の庭に、つゝじいろく

さかりなるを見て、

庭や須弥四方の色見る岩躑躅

北ハ黄に、南ハ青く、東白、

西くれなるに染色の山。

これを心におもひて、四

方の色見るとはいひし也。

ほととぎすの初聲をきゝて、

耳に今見る初花よほととぎす

祇園にて

聲や鐘ぎをん精舎の子規

数入道殿、嗣孝卿に家をゆづりて、程

遠く木ぶかきかくれに、山里めきたる

小柴など引かこひてすませ給へるを、

卯月の比、とぶらひたてまつりけるに、

山ほととぎす折しりがほなる聲して

たびく行めぐりければ、

ほととぎすとふやしげきのかくれ里

と申ければ、

立圃

枕をはづし見る夏の月

檀替

又の日、これを聞つけ給へるとて御一順に、

ともし火のきゆる所を立のきて

木屑

咳氣やせんと風いとふなり

几

日をえらびすゆべき灸をおろしをき

己

手かひの猫をかはゆがる人

且抱

其比、さる御かたより、

風 手 入 持 扇

帳のまハリによらぬ蚊の聲

立圃

月なミのあそびなどいへる人々の方へ、

去年生てことしハ孫か蘭の竹

夏の代より蚊や出そめてなつの聲

竹の子のやしなひ親か梅の雨

さつきつゝじの咲けるを、

染色の花や五月のひかりへに

五月雨の晴間や沖の小人嶋

木 ちる花の跡にぎハひの青葉哉

火 しり影の赤きや猿とはたるの火

土 うぐひすの笛や土用の聲の色

金 つりがねの遠音も白し空の月

水　こほりてや色もかたまる硯水

五行五色を一句にいふとて、

入月にさしむかひなり朝日山

月ハ陰精の水、其色黒シ。入方ハ

西、白キ金也。

日ハ陽精ノ火、其色赤シ。出ル方ハ

東、青キ木也。

中央の山ハ、黄なる土也。

端午

雲も今朝しやうぶがさねや花あやめ

これも世のかざりちまきよ人心

氷室

人毎に氷をけふや持あふぎ

異国まで氷室の例や白砂糖

六月十六日、遊びに出て

遊山にや老も嘉定の年の宴

夏ながら土用や秋の夕涼ミ

菘

涼風は身のなで物かゆふばらへ

万治四

林鐘

立圃書

松翁(朱印)